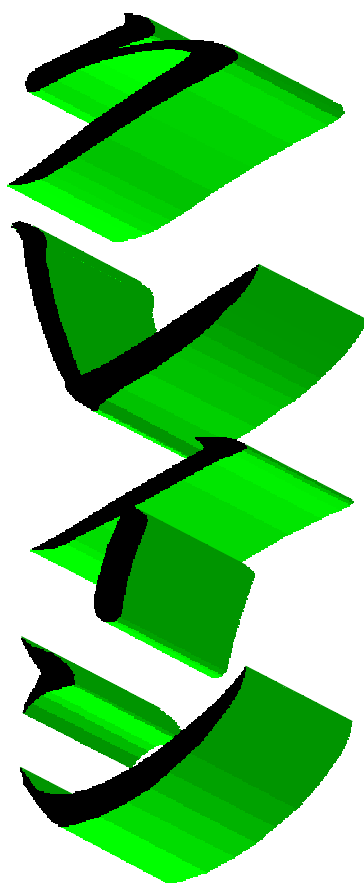
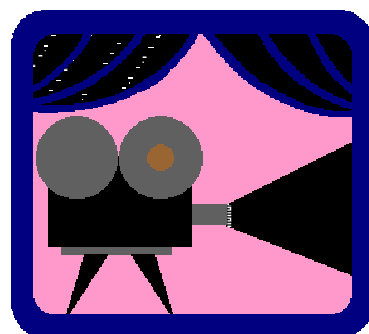


児童劇「わが友クレイン」原作



作
さ
す
ら
い

v q a 8 3 9 2 2 @ b i g l o b e . n e . j p



登場するのは……

クレイン（アンドロイド）

神様

悪魔

ヨシオ

ウンタ

ソウジ

ハル

ナツ

アキ

フユ

ハラグーロ

その部下たち

やせた男

警官たち

他演出の必要に応じて。

プロローグ

神様と悪魔が議論していた。

「人間などという者は とんでもない生き物だ。人を憎むし、だますし、戦争をするし、

このごろでは自然をせつせとこわしておる。しかも、悪いことは相手のせいばかりする。」

「いやいやそんなことはないぞ。困っている者を助けようとするし、力を合わせて問題を

解決しようとしている。努力もするし、間違いは反省する。」

「それほどまで言うのなら、どちらの言うことが正しいかひとつ確かめてみよう。」

「望むところだ。人間に望みがあるかどうかを見てみよう。」

というわけで、物語は始まった。

ヨシオとウンタとソウジの三人は、いたずらをこつてり叱られていて、すっかり帰りが遅くなってしまった。ぶつぶつ言っている三人の後から、ハル、ナツ、アキ、フユの四人が冷やかしながら歩いてくる。

「まったく三人ともどじばかり。」

「しつっこいなあ、ナツは。もういいかげんにしてくれよな。授業中遊んでいただけじゃないか。」

「ウンタ、あんた体が大きいから目立つのよ。」

「アキ、まあいいからいいから。」

「何言ってるんだよ。ソウジ、お前がはじめたんだろ。俺何にもしていなかったんだぞ。」

「ヨシオ、後悔先に立たずって言うのよ。つられなけやいいのに。」

とフユ。おしゃべりに夢中になっっているうちに、七人は、町外れの小さな林にさしかかっていた。先の方を早足で歩いていたハルが突然立ち止まって動かなくなった。それに気がついたヨシオが呼びかけた。

「おい、ハル。どうしたんだ。」

「ね、ヨシオ、あそこに何か見えない？ ほら、あの木の横の所。」

「本当だ。白い者がぼーっと浮かんで見える。何だろう。」

そばに近寄っていったハルが小さな叫び声をたてた。

「たいへん。人が倒れているわ。助けなくっちゃ。」

七人は素早く駆け寄った。大きなケヤキの下、枯れ葉の上に女の子が横たわっていた。どうやら意識がない様子だった。ハルは手を取って脈を診た。

「大丈夫。気を失っているだけよ。」

ヨシオが大きな声で呼びかけた。すぐに、女の子は目を開けてゆっくりと上体を起こした。

「ここはどこ？ あなた方は誰ですか？」

「俺たちはヨシオ、ウンタ、ソウジ。近所に住んでいるんだ。」

「私たちはハル、ナツ、アキ、フユ。あなたは誰？ こんなところにどうして倒れていたの？」

「わたしはクレイン。なんでここににいるのだろう。わからないわ。」

見れば見るほど変わった女の子だった。全身白っぽい服装に大人っぽいブーツをはいている。頭にかぶっている帽子まで真っ白で、しかも二本のアンテナのようなものがついていた。服をよく見ると金属的な光沢が感じられた。

そのとき、急に林の中から大きな笑い声が聞こえてきた。子どもたちがぎょっとして振り向くと、二人の老人がにこやかに笑いながら奥から出てきた。一人はやせていて背が高く、黒い大きなトランプひげ。もう一人は丸顔でサンタクロースのような真っ白なひげ、背はあまり大きくなかった。変わっていたのは、片方が黒っぽい服装、もう片方が白っぽい服装と対照的だったことだ。子どもたちが全く知らない顔だった。

「おどろかさないでよ。おじさんたちだれ。知らない人ね。」

ナツがやや強い口調で聞いた。

「いや、びっくりさせてすまない。わたしたちは、遠い国から来た科学者だ。今町のホテルに泊まっておるんじや。」

「何がおかしくてさつき俺たちを笑ったの。」

ウンタが口をとんがらせた。

「すまんすまん、別に君たちがおかしかったわけじゃあないんじやよ。クレインを見て何も気がつかないのでつい愉快になってしまっただけじや。」

「クレインはのう。実は人間ではなくて、わたしたちが作ったアンドロイドなのじやよ。アンドロイドというのは、人間そっくりのロボットのようなものじや。」

「子どもだと思っからかわないで下さい。クレインはあつたかいし、脈だつてあるわ。」

ハルは二人の科学者に向かって言った。

「それだけわたしの腕がすごいということじやよ。クレインは、実はまだ生まれたばかりでな。自分の名前のほかはなんにも知らないんじや。」

「それで、わたしたち二人でいるんなことを教えるために旅に連れてきたというわけじや。おお、そうじや。君たちは倒れていたクレインを助けてくれようとしたんじやな。良い子たちらしいの。どうだろ、しばらくこのクレインの友だちになって、いろいろ教えてやってくれないかのう。」

「うむ、それは良い考えじや。わしからもよろしく頼む。わたしたちは年をとりすぎていて、どうも考え方が古いらしい。君たちなら子どもの気持ちで話し相手になるじやろ。クレインは、生まれたばかりなのでまだ心の中が真っ白なんじや。良いことと悪いことの違いも分からない。君たちで教えてやってくれないか。」

「でも、ぼくたち……」

「ではたのんだぞ。わしらは町のホテルにいるでな。」

「科学者たち二人は子どもたちの返事も聞かずあつという間に立ち去ってしまった。」

「まいったなあ。どうする？ヨシオ。」

「どうするって、このままおいて行くわけにもいかないだろう？とりあえず、うちの母に話してみるよ。クレイン、心配しないで。」

「ヨシオ、わるいわね。あしたはうちの母に頼んでみるわ。」とハル。

子どもたちがいなくなった後、町のホテルに行ったはずの二人の科学者が林の中から出てきた。先ほどの人の良い人間らしい雰囲気はなくなっていた。

「あの子たちと一緒にいるクレインを見ていれば、人間が良い者が悪い者が分かる。あの子たちが良いことを教えてくれればクレインは良いアンドロイドになるだろう。」

「万が一悪いことを教えたなら、何も分からないクレインは悪いことをしてしまう。うそをつかれれば信じてしまうだろう。悪事でも良いことだと信じ込んでしまう。」

「だからといって、クレインに悪いことをさせるわけにはいかない。そんなことをしたら人間の世界をめちゃくちゃにこわしてしまっただけの力があるのだから。」

「だから、もしクレインが悪いことをしようとしたら、クレインの体は少しずつこわれていってしまうようになっておる。たとえばうそをひとつだけだけでもどこかがこわれるのじゃ。」

「しかし、あの子たちならクレインに良いことをたくさん教えてくれるだろう。そうしたら、もともと良いことや人のためになることをするようにできているクレインは幸せになるに違いない。」

「いや、子どもだからといって良いことをするとは限らない。意地悪やいたずら、うそやわがママを教えるに違いない。そしたら、クレインはまねをする。かわいそうだがクレインはおしまいだ。こわれてバラバラになってしまう。」

「いや、大丈夫。人間は信じられる。」

「いやいや、人間はあてにならない……」

子どもたちはクレインの持っている不思議な力にすぐ気がついた。まず、勉強が良くできる。子どもたちの見せた宿題を見たときに答えを出してしまった。宿題についてたって馬鹿にできない。何しろ六年生だ。問題はそれなりに難しい。分数が出てくるかと思えば小数。漢字に歴史に家庭科まである。それをクレインはすぐにやってのけた。答えはすべて正しかった。生まれたばかりのアンドロイドだそうだが、生まれて十二年経っているウンタなんか束になってもかなわない。まるで、百科事典が服を着て歩いているようなものだ。それだけではなかった。順番に腕相撲を試みたら、みんな腕を組んだときに負けていた。いつ押さえ込まれたかもわからなかった。七人が、顔を真っ赤にして一緒にクレインの腕にとびついてもびくともしなかった。すごいのはそればかりではなかった。クレインが、そおと立っていると、頭や肩に小鳥がとまるのだ。ワンワンほえていた犬も、クレインを見ただけでおとなしくなつて、しっぽをちぎれるように振りはじめた。生き物すべてに好かれていたようだった。

そんな超人のクレインなのだが、子どもたちが何かをしようと、顔を真っ直ぐに向けていつもじっと見つめていた。そして、必ず聞いた。「それは良いことですか？」と。「そうだよ。」と返事をする、うれしそうにっこり笑うた。うなずくのだった。この間なんか、ゴミ拾いをしていたハルが、例によって「それは良いことですか？」と聞かれたので、「もちろんよ。こつやつて気がついた人がゴミを拾っていれば町中がきれいになるでしょう。」と答えた。たんに、クレインは猛烈な勢いでゴミを集めだして、あつという間にそのあたりをきれいに片づけてしまったのだ。

子どもたちはみんなクレインが好きだった。何でもできるのに、一度だって自慢したり得意そうな顔をしたりしたことがなかった。ほめられたりするとちよつぱり恥ずかしそうにしてにっこりと笑うのだった。クレインが「それは良いことですか？」と例のせりふを言ったとき、ヨシオが、何でもそんなことを聞くのかと尋ねてみたことがあった。クレインは、いつものようににっこり笑ってこつ答えたものだった。

「わたし、良いことをたくさんたくさん知りたいのです。そして、みんなの役に立ちたいの。」

ただ、子どもたちの母親の多くが、クレインを遠くから眺めるだけで、話しかけたりしなかった。中には、顔を寄せて、時々クレインを指しながら眉をひそめる人もいた。アンドロイドが理解出来なかったのだ。理解できないのにそこに確かに存在しているクレインは、やっかいもの以外の何物でもない。だから、関わりたくなかったのだ。

クレインが、ヨシオやハルといるとき、ウンタとソウジとあたふたと駆けてやって来た。

「クレイン、助けてくれよ。俺たち困っているんだ。」

「なにあわてているんだい。そんなに息を切らせて。」

ヨシオが聞くと、お調子者のソウジが気取った口調で言った。

「いやあ、よく聞いて下さった。実は、このウンタのやつ、授業中他のことをしていて勉強がわからなくなったんだ。」

「そんなことなら、いつだって困っているじゃないの。」

ぴしゃりとハルが言うと、

「それがだな。ウンタのやつ、先生に怒られただけでなく、宿題まで出されちゃったんだ。」

「なんだ、そんなことか。やっていけばいいじゃないか。」

「えへん、自慢じゃないが、俺にはさっぱりわからないんだ。眺めているだけで、数字が頭の中で輪になって踊り始めるんだよ。」

ウンタがいばって言った。

「そこでだ。クレイン殿、この気の毒なウンタのために宿題をやってくれないだろうか。」

「ちよつとそれ・・・。」

ハルがずるいと言おうとすると、あわててソウジが止めた。そして小さな声でささやいた。

「かたいこと言わないで一回だけ。これやっていかないと、ウンタのやつ残り勉になっちゃうんだよ。」

クレインは、ウンタとソウジの方を見つめたままいつものように尋ねた。

「それは良いことですか？」

「も、もちろんだとも。困っている人を助けるのは立派なことなんだよ。」

「先生だつて、ウンタが宿題を持っていけばすごく喜ぶ。これは人助けなんだ。」

「わかりました。ちよつと見せて下さい。」

あつという間にクレインは宿題をやってしまった。

ウンタとソウジはしてやりたりという顔を見ると、まじめくさってクレインに言った。

「かたじけない。クレインは本当に良いアンドロイドだ。」

「お役に立ててとてもうれしいです。」

クレインが答えたとき、アンテナの一本が音もなく折れて下に落ちたが、だれも気づかなかった。

これが始まりだった。クレインの所に子供たちは次々に相談事を持ち込んできた。なかにはまともなこともあったが、そうでないことの方が多かった。自分の代わりに喧嘩に行ってくれたの、いたずらのわびをしてくれたの、買ひ物の手伝いをしてくれたの、ろくでもない頼みが多かった。幸いなことに、ヨシオやハルが近くにおいて「良いことですか？」のいつものクレインの問いに正しい答えを出して事なきを得ることが多かった。ところが・・・

ある日、アキが車にひかれかけた時、たまたま一緒にいたクレインが、片手で車を止めて助けたことがあった。大通りの真ん中での出来事で、大勢の人に見られてしまった。それをきっかけに、クレインと遊ぶのを禁じる家が多くなった。クレインを気味悪く思っただの。「人間離れしている・・・」「まるで怪物みたいだ・・・」等々。クレインと変わらなずつき合うのは、ハルとヨシオぐらいだった。なんで嫌われるのがわからないクレインは傷ついていた。さらに困ったことに、クレインのアキ救出の一部始終を見ていたテレビ局の人が、特ダネニュースとして放映してしまっただ。クレインの噂が、マスコミを通してそこら中に広がってしまった。一夜にしてクレインは有名人になってしまった。

三

翌日から、いろいろな人間たちがクレインのところに来てきた。そのほとんどは、クレインを一目見ようという人たちだった。クレインに口々に話しかけたり、クレインを触ったり大騒ぎだった。クレインが口を開こうとすると耳を傾けてくれるようにも見えた。しかし、クレインのいつもの「それはよいことですか？」の問いかけにまともに答えようとする者はいなかった。大勢に囲まれてもクレインは孤独だった。

クレインを利用しようとする者たちも次々に現れた。プロ野球のスカウトや相撲の親方などのスポーツ関係者から、クレインで一攫千金をたくらむ者や政治家までもが。そして。

その日男はひっそりとやってきた。りっぱな身なりににやかな表情。しかし、目の奥でなにを考えているかわからないところがあった。部下だという男たちも、うさんくさかった。まずいことに、ヨシオもハルもいなかった。このふたりも、このごろめつたに來なくなっていたのだ。やがて、男はゆっくりと口を開いて、言葉を選ぶようにして

慎重に話し始めた。

「クレインさん、わしはハラグーロというものじゃ。助けて欲しいのだ。」

「それは良いことですか？」

「いつものようにクレインが聞いた。」

「もちろん良いことだとも。実はな、わしは悪い奴に狙われてほとほと困っておるのじゃ。クレインさんにその男を説得してもらえたらありがたいのじゃ。」

クレインがハラグーロの事務所に行くの間もなく、痩せて貧相な男が訪ねてきた。

「お願いだ。わしの金を返してくれ。あれがないとわしは暮らしていけないんじや。」

「わしは知らないぞ、そんな金。言いがかりだ。帰ってくれ。毎日押し掛けられては迷惑だ。」

「ハラグーロ、この人でなし！」

痩せた男はいきなりむしゃぶりついてきた。

「あいたた。クレインさん、助けてくれ。暴力は悪いことじゃとあんたも知っているな。それをこいつに教えてやってくれ。」

「乱暴はやめてください。」

クレインが、痩せた男の手をつかむと、男は悲鳴をあげて手を離れた。クレインは、ドアからその男を押し出した。その様子を見ていた部下にハラグーロはさつと耳打ちした。

「なつ、思った通りこいつは役に立つだろう。良いことだと言っておけば疑わない。便利な道具じゃないか。」

そのときクレインが振り返ってハラグーロに聞いた。

「さっきの人が言っていた『金』って何ですか？」

少し、考えてからハラグーロが答えた。

「金というのは、人間にとって食べ物のように大事なものじゃ。それがないと生きていけないくらいな。」

言いながら、ハラグーロは急に両手を打った。

「そうじゃ。金のことであんたに頼みたいことがあったんじや。」

ハラグーロは、懷から一枚の紙を取り出して広げると、クレインを手招きした。

それは町の地図だった。大きな建物のあるところを指さしながらハラグーロは話し始めた。

「今わしがいったように、金というのがないと人は誰でも困るのじゃ。ところが、ここに、その金をたくさん集めてしまつて、誰にも渡さないようにしまい込んである建物がある。ほんと、みんなのものなのに、独り占めしているというわけじゃ。そのために、世の中のたくさんさんの者が生活に追いまくられてなさない思いをしておる。わしはな、クレインさん、世の中のため、人々のために、そのけしからん人間どもところに掛け合いにいくつもりなのじゃ。そこに無駄にしまい込まれている金をみんなに分けてあげるのだ。そこで、あんたにこの仕事をぜひ手伝つてもらいたいのじゃ。」

「それは良いことですか？」

「もちろんじゃと。町中の人間が喜ぶ。人助けなのじゃよ。」

「わかりました。みんなの役に立つのなら、喜んでお手伝いします。」

ハラグーロたちの車がついたところは、大きな銀行の建物だった。男たちが掛け合つてゐる間に、クレインは、ポール紙みたいに簡単に金庫を壊すと、中の紙幣や金塊をハラグーロたちの車に運んでいった。

「わっはっはっは。あんたの力で、あっさり金が入った。あとは、わしが町中の人に分けてやることにする。クレインさん、あんたは本当に良いことをした。」

このとき、クレインの体のあちこちに細かなひびが入り始めたのに、ハラグーロたちもクレイン自身も気がつかなかった。こうして、クレインは、銀行強盗になつてしまった。

四

ハラグーロ一味は追いつめられていた。次々に重ねていった悪事は、初めのうちこそ順調だったが、クレインを連れていることが裏目に出ていた。姿がめにつくだけでなく、その破壊の跡がすさまじく、かえつて足がつく結果になつた。クレインは何も知らなかつた。「人助け」という言葉を信じて疑わなかつた。ただ、クレインの体の輝きはなくなり見る影もなかつた。外からの力で痛むことはなかつた。例えばピストルを撃たれようと、鉄の棒でたたかれようと、かすり傷一つつくことはなかつた。この世のどんな力を持つてきてもクレインを壊すことは出来なかつただろう。それが、ハラグーロたちと行動を共にするうちに、少しずつ自壊していつてゐるようだった。動きがぎくしゃくしてきて、かつてのような人間の少女らしさは失われていた。どうかすると、言葉もただどしくなることがあつた。自

分が何かする度に壊れてくるのがクレインには分かっていった。だが、それがなぜなのかということがわんからなかった。なぜ「人助け」がそういう結果につながるのか、「良いこと」「人の役に立つこと」がどういうことなのか分からなくなってきた。クレインは悩んでいた。

警官が追いかけてきていた。ハラグーロの車が故障し、一味は走って逃げた。クレインは壊れかけていて思うように走れなかった。それを見たハラグーロが言った。

「クレインさん、後ろから追ってくるのは、悪いやつらじゃ。わしが、金をみんなに配ろうとするのを妨害しようとしておる。あんたここであいつらを止めてくださらんか。その間にわしがこの金を配ってしまうことにする。」

手下がささやいた。

「ボス、いいんですか。クレインを手放して。」

「いいころあいだ。もう十分働いてもらったし、足手まといになりかかっていたところだ。やっかい払いにちょうどいい。あいつが暴れて警察を引きつけている間に、俺たちは逃げ切れる。」

「おっしゃるとおりで。」

警官が近づいてきた。クレインがその前に立ちふさがった。ハラグーロたちが遠ざかっていった。

「お願いします。追いかけないで下さい。お金をみんなに分けるまで待つて下さい。」

「何をばかなことを言っているんだ。そこをどけ。」

警官たちがクレインをいくら押しても動かそうとしても、ぴくりとも動かなかった。

「これは良いことです。お願いします。待つて下さい。」

「お金を盗むのが良いことだというのか。ばかも休み休みに言え。これ以上邪魔をするな。」

「お前たちのやったことは、とんでもない悪いことなんだ。居直りもいい加減にしろ。」

そのときクレインの中の何かが音を立ててはじけた。そして、ゆっくりと倒れていった。警官たちは、クレインを乗り越えてハラグーロたちの去った方に走っていった。

「わ・る・い・こ・と?・・・」

クレインの口から言葉がもれた。まだ、完全にこわれていなかった。かすかに意識があった。

静かな時が流れた。クレインの目にいろいろな人間の情景が映っていた。これまでインプットされた記憶が多かった。ヨシオやハルたちとの交流。仲間と遊んだ思い出。人助けをして感謝されたときの暖かい思い、そして・・・ハラグーロの事務所で会ったやせた男の悲しげなまなざしが突然浮かび上がってきた。なぜかこの思い出にはクレインの知らないはずの続きがあった。男は、とぼとぼと小さな部屋に帰っていく、そこには、小さな子どもが待っている、食べ物もなくてしょんぼりしている二人。クレインの心に、洪水のようにたくさんの情景が流れ込んできた。この世の良いこと、悪いことを象徴するようなさまざまな情景が。

「わかった！」

クレインの口から不意に小さな叫びがあがった。

「わかったわ。何が良いことで、何がいけないことが。わたしが壊れてきた理由が。」

そのとき、軽い足音が聞こえた。誰かが走ってきた。クレインはゆっくりそちらを振り向いた。やってきたのはヨシオとハルだった。ニュースでクレインがここにいることを知って駆けつけてきたのだ。

「クレイン！」

倒れていたクレインに二人は駆け寄った。

「クレイン、ごめんよ。放っておいて。」

「私たちがそばにいれば、あんな悪人にだまされませんんだのに。」

「また、前みたいに楽しくあそぼうぜ。」

「良いことたくさんしましょう。」

「ありがとう。私、悪いことを手伝ってしまいました。こわれてあたりまえです。」

「クレイン、しっかりしろ。きつと直るよ。」

「そうよ、あの科学者のおじさんにたのんで直してもらおうわ。」

クレインは弱々しく立ち上がるうとした。

「わたし、直りたい。良いことがどういふことが、やっとわかったの。こんどこそ、みんなの役に立つことが出来るわ。みんなの喜んでくれるをたくさんたくさんしたい。だから、わ・た・し・・・な・お・り・た・い・・。」

それが、クレインの最後の言葉だった。二度とクレインは動かなかった。人間のように話した口はぴくりともしなかった。ヨシオとハルは静かに泣いた。

クレインの体は研究機関に預けられ、分解された。子どもたちは反対したが聞き届けられなかった。不思議なことにクレインの体の中には何もなかった。誰もが予想したような機械も電子部品もなかった。まったくのからんだつたのだ。大人たちは首をひねった。ホテルにいるはずの例の二人の科学者も姿を消していた。というより、はじめから存在していなかったとしかいえなかった。子どもたち以外に科学者を見た人はいなかった。研究機関にあったクレインの体も、ある日忽然と姿を消してしまった。こうして、クレインの存在を証明するものはこの世からなくなった。ハラグーロたちは逃げたままだった。もちろんハラグーロに聞けたとしても、自分たちの犯罪を証明するクレインのことなど、知らないと言うに決まっているが。子どもたちも、だんだんにクレインのことを忘れていった。子どもは子どもで毎日忙しかった。

ヨシオとハルは、しかしクレインのことを忘れなかった。ふたりは、時々クレインのことを懐かしく話し合った。クレインの体がなぜ空っぽだったのかを二人はこう考えた。きつと、クレインの中には心だけが詰まっていたのだろうと。人間によってそそぎ込まれた心がクレインの中を満たしていたのだろうと。そそぎ込まれる人間の心次第で、良くも悪くも染まってしまうクレイン。だから、あんなに「良いことですか？」とこたわっていたいたに違いない。自分たち人間の心も、案外、クレインのように空っぽなのかもしれない。そのときそのとき満たされたもので突き動かされているにすぎないのかもしれない。でも、クレインのように、自分のすることを「良いことですか？」と問いかけている時がどれだけあるだろう。例えば悪いことをしたとしても壊れることもない、逃げているハラグーロのように。せめて自分たちは、これからずっと「これは良いことかな」と自分自身に問い続けて生きていこう、ふたりは誓い合った。

エピソード

神様と悪魔が口論していた。

「人間などという者は、とんでもない生き物だ。人を憎むし、だますし、戦争をするし、

このごろでは自然をせっせとこわしておる。しかも、悪いことは相手のせいばかりする

クレインも、だましてとうとうこわしてしまいおった。」

「いやいやそんなことはないぞ。困っている者を助けようとするし、力を合わせて問題を

解決しようとしている。努力もするし、間違いは反省する。悪いのはハラゲーロのような一部の人間だ。

ヨシオとハルをみる。まだ、人間には希望がある。」

「それほどまで言うのなら、どちらの言うことが正しいかひとつ確かめてみよう。」

「望むところだ。人間に望みがあるかどうかを見てみよう。」

というわけで、物語はまだまだ続きそうである。